

2020 こうち総文〈郷土芸能部門〉総評

伝承芸能部門審査員 児玉 信

「2020 こうち総文」郷土芸能部門は、新型コロナウイルス感染拡大のあおりを受けて web での開催となりました。

数年を跨いで準備に奔走されてきた実行委員会事務局の先生方にとって、前例のない対応に追われ続けた、気の休まらない日々であったことは想像に難くありません。大会が動画審査で開催の運びになったと伺ったときはホッと、中止にならなくて良かった！と素直に喜びました。改めて事務局の皆様への感謝を申し上げます。

同時に、事態の推移を受け入れ、充分とは言えない期間で映像作品を仕上げた参加された出場各校の皆さんの、この大会への意気込みにも敬意を表します。

とはいえ、諸条件に鑑みて優秀賞などの授賞を今回は行わず、したがって受賞校による国立劇場での東京公演も行わないということでしたから、残念に思っている生徒たちもいることでしょう。

これまで私は、結果発表に一喜一憂する出場各校の生徒たちの客席での様子をステージの上から見てきました。それは、先ほどまでの熱気の余韻が深く心に沁み、肌粟の立つような肅然とした気持ちにもさせられる審査員冥利を感じる情景であり、だからこそ国立劇場にも足を運んで感動を新たにしてきましたので、そういう、いわば醍醐味に浸る場に立ち会えなかった淋しさが、実は私にもあることを申し上げたいと思います。

審査についてですが、伝統芸能は、例えば、整然として華やかで見るからに心躍るというような躍動的なものもあれば、素朴で物静かに見えながら洗練されているものもある、あるいは神事の厳粛さと余興のくつろぎが備わるものもある、というように姿は千差万別なので、一概に同列には比べられないものという認識のもとで場に臨んでいます。

その上で、大会はステージ上での発表であり、時間の制限もあることから、演目の省略・短縮とか、現地で行われてきた一連の行事をダイジェスト演出で構成して見せるなどのことがあつたりもするのですが、私は、若い伝承者である皆さんの郷土愛から発する創意や工夫を楽しみつつ、土地に根差して生まれ伝えられてきたそれぞれの芸能のエッセンス、いうならば「祈りのかたち」が、舞台から脈々と伝わってくるかどうかには比重を置いてきたのです。

審査員席は舞台全体が俯瞰できるよう、おおむね客席の後方中央にしつらえられています。席にいて感じる、パフォーマンスごとに伝わってくる観客の素直な反応も私にとっては審査のよりどころになります。それと、プログラムに記されてはいるのですが、上演前のアナウンス紹介も私には審査する上での大事で、

演じようとしている芸能や演目の要点が、短い字数の中で過不足なく示されて私の耳に届いてくるか、その芸能を現地で見てみたいと観客に働きかけてくるものになっているか、というようなことも参考にさせてもらっています。

今回の画像審査も、基本的には、私のこれまでのスタンスで当たらせてもらいました。しかし、例年のように出場校の皆さんと観客が一堂に会して醸してきた空気感の共有は望めないことでしたし、映像を撮った日時も当然ながら別々であり、撮影場所もステージであったり野外であったりとそれぞれ違うので、その点で難しさを感じたことは否めません。

その代わりに、舞台上手に位置する囃子方の背後から演技を映すとか、演者をクローズアップするとか、プロローグとエピローグを加えて1つの芸術作品に仕上げるというように、通常では見ることの出来ないカメラアングルを用いて参加した出場校もあって、それなりに面白く見ました。ただ、この工夫を多とはするものの、従来の「郷土芸能部門」審査という観点からは、やや異質と思わざるを得ませんでした。これは別の領域に入れるべきものだったのではないのでしょうか。

なお、今回の画像には、撮影場所や日時・撮影者などといったデータを記していないものが多く、私としては残念に思っていることを付記します。

「2020こうち総文」の大会イメージソングの曲名は『繋ぐ』でした。新型コロナウイルスの終息は未だ見通せませんが、「紀の国わかやま総文2021」が恙なく開催され、無事に次の開催地に引き継がれますよう、心から願っています。

令和3年7月